



# ライバル



嫉妬

春日信彦

## 反抗期

ここ最近、孤立無援のアンナは、どうしていいか分からず落ち込んでいた。というのは、育児に自信をなくしてしまったからだ。2歳になった拓実と二人だけで遊んでいるときは、愉快的気持ちに浸れるのだったが、なぜか、亜紀が突然現れ、アンナを押しつけて拓実と話し始めるとイライラが爆発するのだった。アンナは、自分自身のことがよくわからなくなり、亜紀と拓実を平等に育てることができるのだろうか不安になっていた。さらに、時々、亜紀に対してカッとなったりすると、結婚すべきではなかったのではないかと思うようにもなっていた。

さやかが去って、ほぼ1年が過ぎ、アンナは、さやかに会いたくなかった。このままだと気が変になると思ったアンナは、現在の精神的苛立ちとさやかへの思いをドクターに告げ、さやかに一刻も早く戻ってくるように懇願した。ドクターは、予定以上に検査が長引いているために、今しばらくは、帰すことができないと伝えたが、とりあえず、アンナの不安を和らげるために一週間だけアンナのもとに帰すことにした。

4月11日(月)、ガッツポーズの日の早朝に、さやかは、元気はつらつとした笑顔でピンクのスズキラパンを運転して家に帰ってきた。今か今かと胸をときめかせ待っていたアンナは、さやかが車を降りると、一目散に駆け寄り、跳びついて抱きしめた。アンナは、再会のうれしさから涙がドツとあふれたが、さやかは涙一つ流さず、たしなめるようにアンナに声をかけた。「ナニ、泣いてるの。アンナったら。もうしばらくしたら、戻ってくるから、しっかりしなさい」

アンナは、ドクターの指示とはいえ、突然消えたさやかともう二度と会えないんじゃないかと不安でたまらなかつた。涙を拭いたアンナは、車を運転して戻ってきたさやかに驚嘆の声を発した。「さやか、いつから、運転できるようになったの。さやかだったら、こっそり運転免許なんか取ったりして、意地悪なんだから。どんなことでも、隠し事はしない約束だったでしょ。さやかの、バカ」アンナは、さやかの変化に驚きつつも、さやかが一歩自分に近づいてきたようでうれしかった。

さやかは、スピードに対する強度の恐怖感から車の運転を拒否していたが、ドクターの勧めでチャレンジすることにした。3ヶ月間も教習所に通い、やっとの思いで、普通自動車の免許証を手に入れた。ドクターにとっては、さやかの自動車運転は、心理実験の一つであった。さやかの一年以上に及ぶ検査は、単に、身体的、頭脳的な検査だけでなく、一般人には見られない超能力と異常心理の検査も含まれていた。

さやかは、スキップで玄関まで行くと、ワンワンとスパイダーが出迎え、その後ろには、ニャ～ニャ～とピースが歓迎の挨拶をした。さやかは、真ん丸い黒目で見つめるスパイダーの頭をナデナデし、擦り寄ってきたピースをヒョいと抱きかかえて、キッチンに向かった。さやかが、あたりをキョロキョロと目配せして、キッチンテーブルのイエローの椅子に腰掛けると、アンナはさやかの大好きなアップルパイを運んできた。「このアップルパイ、手によりをかけて作ったんだから。バリうまいんだから。ハイどうぞ」

次に、アンナは、深川製磁のブルーを基調としたティーカップとティーポットをトレイに載せ手運んできた。ティーポットをそっと手にするとティーカップにジャスミンティーをゆっくり注ぎ、お客に差し出すようによそよそしく差し出した。一年ぶりのさやかは、どことなく大きくなったように見えた。小柄な体形が突然大きくなったというのではなく、言葉では言い表せない神々しいオーラを漂わせ、さやかを大きく見せていた。アンナは、さやかとドクターが二人でどんなことをやっているのだろうかに興味があった。

「さやか、一年以上も、いったいどんな検査をやってるのさ。元気そうな顔を見たから、心配はしてないんだけど、さっさと帰ってきなよ。アンナは、一人ぼっち、寂しいんだから。聞いているの？」さやかは、ピースの笑顔に答えて、ニコツと笑顔を作っては、ピースの顎の下を指先でコチョコチョコとくすぐっていた。さやかは、アンナの話が耳に入らなかったかのように話を替えた。「そう、拓実ちゃんは？」

アンナは、拓実と聞いて、胸の奥に押し込んでいた積もり積もった悩みが、堰を切ったように一気にあふれ出してきた。「拓実は、自分の部屋で、カラオケ。毎日、歌ってるのよ。亜紀ったら、拓実を歌手にすると行って、拓実のマネージャー気取りなんだから。手に負えないわ」さやかは、まだ2歳の拓実がカラオケで歌っているのが信じられなかった。「え、拓実は、まだ、2歳じゃない。もう、カラオケで歌えるの？本当に、歌手になれるかもね」

アンナは、口をゆがめて答えた。「最近、反抗的なだよ、亜紀ったら。とにかく、口ごたえが多くて、困ってるのよ。さやかから、何とか言ってくれない。それに、拓実にあまりかまわないように言ってよ。学校から帰ってくると、宿題もせずに、拓実にべったりくっついて、カラオケよ。お手伝いもしないのよ。さやかがいないと、この家族は、崩壊よ。さやかのせいよ」

帰ってくる前からアンナのノイローゼを心配していたが、アンナの苛立ちが尋常ではないことに気づき、どうにかしてあげないと、このままだと亜紀と拓実に八つ当たりするんじゃないかと不安になってきた。アンナは、いったんキレルと、歯止めきかなるところがあった。アンナは、子供っぽいところがあり、感情のセルフコントロールが苦手だった。アンナの口調から、すでにヤバイ状態になっていると感じ取られた。

「アンナ、イライラするのは、よくわかったわ。亜紀も、悪気はないのよ。きっと、拓実がかわいくて、ベタベタしてるんだわ。アンナが、拓実がかわいいように、亜紀にとっても、拓実がとともかわいいのよ。そう、亜紀は、反抗期に入ったのよ。子供は、必ず、反抗期が来るの。アンナが嫌いってわけじゃなく、とにかく、周りの人とうまくやっていけないときがあるのよ。アンナにも、そういうときがあるじゃない。それなの」

さやかは、アンナの苛立ちの原因をうすうす感じ取っていた。それは、実子である拓実にベタベタする養子の亜紀に対する嫉妬ではないかと思った。そのことは、アンナには、言えなかった。もし、そのことを口にすれば、アンナの感情をますます混乱させるように思えた。女の嫉妬は、理性ではどうすることもできないものであることを理解していたさやかは、じつくりとアンナの気持を聞くことにした。そして、少しでも、気分を楽にしてあげようと思った。

血走った目つきのアンナは、口を尖らせて話し始めた。「でも、亜紀は、とにかく、異常よ。二人っきりで部屋にこもって、拓実とカラオケよ。私が入っていくと、拓実はレッスン中、ママは邪魔って言うのよ。頭がおかしいんじゃない。拓実は歌手になんかならなくていいのよ。そう、口癖のように拓実は女子よりかわいいから、きっと、アイドルになれるって言うのよ」

アンナの話をしていると、確かに亜紀は拓実に対する偏執的な行為を示しているように感じられたが、アンナにも、母親としての心の余裕がないように思われた。亜紀には、言葉では言い表せない、自責の念があると思われた。それは、不可抗力ではあったが、亜紀が5歳のときに2歳の実弟を餓死させたことだった。きっと、そのことが亜紀の拓実への偏執的な愛を生み出しているのではないかと思われた。

どうにかしてアンナの気持ちを落ち着かせなければ、ノイローゼがますますエスカレートしそうな雰囲気になっていた。さやかはアンナの相談に名案が浮かんだわけではなかったが、アンナに静かな声で話しかけた。「アンナ、あせっちゃダメ。拓実も亜紀も、アンナの子供じゃない。姉と弟の仲がいいことは、うれしいことよ。そうだ、今夜は、夜桜を見ながら、夕食というのはどう？アンナ、気分転換しなくっちゃ」

アンナは、無然とした顔で答えた。「そうね、夜桜を見ながら、カラオケもいいかもね」さやかは、アンナの気持ちが少し晴れてきたようで少し安心したが、アンナは、さらに、重大な問題を話し始めた。「ほら、メールに書いていたでしょ。中卒のことだけど、どうすりゃいい？嘘は言いたくないし、かといって、憎たらしいあいつらに、中卒とは言いたくないし」アンナは、授業参観の日に、お母さんたちから出身大学を聞かれたのだった。

この学歴問題の発端は、亜紀と秀樹が、数学の平方根の話をしていたときのちょっとした質問だった。その質問とは、「平方根と大根、どっちがおいしいの？」と言う秀樹への質問だった。秀樹は、冗談だと思い、「その冗談、最高！」と言って笑い転げて帰ったが、秀樹は、家に帰るやいなや母親にアンナが言った冗談を話したのだった。そして、意地悪な秀樹の母親は、亜紀のママは吉本より面白いと、クラスの母親たちにアンナの冗談をラインで流し、笑いものにしたのだった。

もしかしたら、本当に数学の平方根のことを知らないのではないかと勘ぐり、秀樹の母親率いる意地悪な母親たちは、アンナの出身大学を授業参観の日に質問したのだった。アンナは、亜紀の面子もあるから、中卒とは言えず、その日は、オホホと気取った笑いでごまかし、さっさと逃げて帰った。さらに、意地悪な秀樹の母親は、子供を使ってアンナの出身大学を聞き出そうともした。質問された亜紀は、恥ずかしくて中卒とは言えず、それかといって、嘘もつきたくなかったので、「知らない」とそっけなく答えていた。

さやかは、アンナから相談を受けてから、ずっと考え続けたが、アンナの中卒の問題は、どんなに考えても名案が浮かばなかった。亜紀の学校は、インテリママの学校で、母親たちは、みんな一流大学卒だった。中には、ハーバード大学、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、マサチューセッツ工科大学、スタンフォード大学など、超一流大学卒の母親たちもいた。クラスのボスである秀樹の母親は、ケンブリッジ大学院AI専攻を卒業した超秀才だった。さやかも、亜紀のてまえ、中卒とだけは言わないほうが良いと思っていた。

中卒のことで改めて相談されたさやかは、頭をかきむしり考え込んだ。中卒とは、口が裂けてもいえない。亜紀が、どんなイジメを受けるか知れたものじゃない。大卒と言えば、ボロが出るし、それかといって、中卒とはいえないし。突然、神のお告げがあったかのように、頭のスクリーンに漫才師のアンナが映し出された。さやかは、顔を持ち上げるとポンと手をたたき話し始めた。「こうなったら、破れかぶれよ。名門大卒は、無理だから、オバカなお嬢様が多い大学卒ってのは、どう。これだったら、オバカでもいいじゃない」



アンナは、目じりを下げて質問した。「どこにあるのよ、そのオバカなお嬢様大学って」さやかは、即座に笑顔で答えた。「ほら、あるじゃない。中洲産業大学ってのが。ここだったら、バレっこないわ。ほら、この大学からは、有名な漫才師や女子アナを輩出しているじゃない。こうなったら、亜紀のために嘘を突き通すのよ。オバカな冗談を連発すれば、きっと、世間知らずのママたちは信じるわよ」

アンナの気持は、まったく晴れなかったが、中卒とだけは亜紀のためにも言いたくなかった。「こうなったら、破れかぶれよ。亜紀のために、中洲産業大学で、漫才師を目指していたと、ママたちに言いふらすとするか。これだったら、亜紀も納得してくれるかも。そうだ、相方は、さやかってことにしておこう。いつでも、漫才を披露できるし。いいわね、さやか」

さやかは、漫才師の相方にされては、ボロが出るように思えたが、とにかく、アンナを元気付けるために一肌脱ぐことにした。「アンナ、こうなったら、亜紀のために頑張るのよ。どんなにオバカなアンナでも、漫才で笑いを取れば、きっと、ママたちもバカにはしないわよ。いざとなれば、さやかも、一肌脱ぐから。亜紀が帰ってきたら、早速、このことを話すといい。アンナの気持ちは、必ず、亜紀に伝わるわ」

## ノッポとチビ

亜紀は入学してから地下鉄で帰宅していたが、3月の終わりごろから、秀樹のお抱え送迎車で秀樹と一緒に帰宅していた。秀樹の父親は、事実かどうか確かめたわけではなかったが、もしかして亜紀が本当に桂会長の孫ではないかと憶測し、秀樹の将来の出世を考えて、運転手に亜紀を自宅に送るよう命じたのだった。今日は、いつもより早く、午後2時前にシルバーのベンツS550が静かに止まった。ベンツを降りた亜紀は、家の前の駐車場に止めてあるピンクのスズキラパンに目をやった。「あら、ピンクのラパン、お客さんかな〜？」

いつもより早いと思ったが、アンナは聞きなれたエンジン音に気づき玄関から飛び出した。アンナの耳は、エンジン音に関しては地獄耳だった。亜紀に駆け寄るといつものように秀樹と運転手にお礼を言って、深々と頭を下げた。亜紀は、気になっていたピンクのラパンについて尋ねた。「ママ、あのラパンは？」アンナは、ニコツと笑顔を作り、甲高い声で答えた。「サプライズよ。あのラパン、何と、さやかの子。驚き桃の木山椒の木。そうだ、運転手さん、秀樹君、ちょっとお茶でもいかがですか。アップルパイを作ったんです」

運転手は、公園のサクラを眺めると言ってお茶を断ったが、秀樹はお茶をよばれることにした。「坊ちゃんは、ご相伴に預かってください。その間、公園のサクラを見ながら、ぶらぶらしてまますから」そういい終わると、白髪の運転手は、ソメイヨシノのサクラが満開に咲いた北側の公園に向かってトボトボと歩いていった。「秀樹君、さあ、どうぞ、どうぞ」さやかと再会できたことでチョ〜ハイになっていたアンナは、いつも以上に秀樹に笑顔をふりまいた。キッチンでは、さやかが亜紀との再会を心待ちにしていた。

玄関のドアをズバツと開けるとアンナは、大きな声で叫んだ。「さやか～～、亜紀が帰ってきたわよ～～」ジャンプするようにビュンと跳び上がったさやかは、玄関にかけていった。一刻も早くさやかと会いたかった亜紀も、ポンポンと靴を脱ぎ散らかし、一目散にキッチンにかけていった。廊下で出くわした二人は、ドスンとぶつかり合って抱きしめあった。亜紀は、涙しながら力の限り抱きしめていた。「さやかオネ～ちゃん、会いたかった。もう、どこにも行っちゃいや。ずっといて」

さやかも亜紀をしっかり抱きしめ、答えた。「ごめんね、こんなに長く留守をして。もうしばらく我慢して。もうちょっとで、検査は終わるから。元気そうで、安心したわ」遅れて歩いてきた秀樹は、小学生のような小さなおばちゃんに明るい声で挨拶した。「こんにちは、秀樹と言います。よろしく」アンナは、秀樹の肩を押しながらキッチンに入り、秀樹を席に着かせた。「秀樹君、アップルパイとお茶をすぐに持ってくるから、そこのおばちゃんとお話をしていてちょうだい」

おばちゃんといわれたさやかは、ムカツと来たが、ちょっと大人びた笑顔で秀樹に挨拶した。「私は、さやかと言います。亜紀のオネ～さんみたいなものね。秀樹君は、亜紀のボーイフレンドね。亜紀ともども、よろしく」目の前にいる女性が若いのか年を食っているのかしばらく考えたが、まったく、年齢の見当がつかず、怪訝そうな顔で秀樹は返事した。「おばちゃんは、アンナお母様の妹さんですか？かなり身長が違いますね」

さやかは、おぼちゃんと言われ、グサッと来たが、アンナの妹と言われたことで、ちょっとは許す気になった。「まあ、そんなところかな。私は、好き嫌いが激しかったから、背が伸びなかったみたいね。それに比べ、アンナは、好き嫌いがなくて、スポーツ大好き少女だったから、スクスクと大きくなったみたい。それと、おぼちゃんじゃなく、これからは、さやかさんって、呼んでね」

秀樹は、二人を見比べ、ますます二人に興味がわいてきた。「さやかさんは、まだ学生ですか？高校生？それとも大学生？」学生と言われたさやかは、気絶しそうなほどうれしくなった。「あら、そんなに若く見える。大学を卒業したばかりよ」さやかは、うれしさのあまり、つい大学卒と嘘をついてしまった。間髪いれず、秀樹はどここの大学か尋ねた。「大学は、どちらですか？僕のママは、ケンブリッジ大学です」

さやかは、いやみな少年だと内心思ったが、ここで答えなければ、変なうわさを立てられると思いアンナと打ち合わせた大学名を告げた。「まあ、秀樹君のお母様のような名門大学じゃないけど、お嬢様が多い中洲産業大学よ。偏差値は低いけど、芸能人は結構出てるのよ」確かにこの大学は、多くのお笑い芸能人を輩出していたが、オバカ大学でも有名だった。そのことを知っていた秀樹は、ますます亜紀の家族に興味があった。

秀樹は、姉であるアンナも同じ大学ではないかと推測し、さらに質問した。「もしかして、アンナお母様もさやかさんと同じ大学ですか？この前の冗談、バリ受けでしたよ」さやかは、ここまで話が進んでは、あとには引けなくなってしまった。「そうなの。アンナも私も芸能コースで、姉妹で漫才師になろうと頑張っていたの。でも、芸能界は、そんなに甘くないのね。まったく、パツとしなくて」

秀樹は、漫才師と聞いてアンナの冗談に納得した。「あんなドアホな冗談が言える方って、只者じゃないと思っていました。ヤツパ、漫才師は違いますね。これからも、ちょ〜ドアホな冗談を聞かせてください」亜紀は初めて聞く大学の話に面食らった。亜紀がさやかの顔をまじまじと見ていると、嘘がばれてはいけないと先手を打って亜紀に声をかけた。「亜紀、二人の漫才、おもしろいよね〜」ニコツと笑顔を作ったさやかは、亜紀にウインクをした。

漫才師は、アンナの中卒をごまかすために思いついた嘘だと亜紀は即座に気づいた。漫才師はさやかの名案だと思い、亜紀もうなずき笑顔で答えた。「そうなのよ。二人の漫才は最高。きっと、いつか、ブレイクすると思う。ママ、さやか、頑張っ」マジに答えた亜紀を見ていた秀樹は、漫才師は本当だと信じ込んだ。「そうか、そんなに、おもしろいのか。ぜひ、文化祭で漫才を披露してください。全校生徒、喜ぶと思います」

秀樹の追い討ちに、さやかの顔は引きつってしまった。漫才は、あくまでも中卒をごまかすためのもので、人前で漫才を披露すれば、嘘がばれてしまうと思った。でも、ここで人前では無理と言ってしまえば、それこそ、漫才師は嘘だと白状するようなものだと思い、腹をくくって、承知することにした。「そうよね、アンナ、漫才を披露する絶好のチャンスじゃない。やりましょう。文化祭って、いつあるの？」

秀樹は、即座に答えた。「9月11日です。是非、お願いします。コンビ名は、ノッポとチビってのは、どうですか？きっと、バカ受けですよ。ボケのノッポにツッコミのチビ、楽しみだな〜」アンナは、突然顔色が青くなった。嘘もここまで来ると罪になるように思えて、さやかの名案が恨めしくなった。亜紀も漫才師は嘘だと思っていたから、いったいこの先どうなるのだろうと顔をしかめてしまった。

さやかは、腹をくくっていた。亜紀に惨めな思いをさせないためには、背水の陣でやるしかないと思った。「秀樹君、最高の漫才を見せてやるわね。アンナ、取って置きのネタをやってあげましょうよ」それを聞いたアンナは、愕然としてしまったが、すべては亜紀のためと思い、アンナも清水の舞台から飛び降りる気持で返事した。「よっしゃ、やったるで〜。笑いすぎて死ななときや。おもしろい漫才、ぶちかましたる」ガッツポーズを作り、両膝を広げて、股まで開いて見せた。

亜紀は、二人のやり取りに開いた口がふさがらなかった。中卒をごまかすためとはいえ、本当に漫才ができるのだろうかと不安になった。でも、アンナとさやかとの息の合った受け答えを聞いていると、漫才ができそうな気になってきた。亜紀は、アンナのおどけた一面を垣間見られて、アンナとの距離が少し近づいたようで、うれしくなった。亜紀も、野となれ山となれ、の心境になり、二人にエールを送った。「頑張れ、ノッポとチビ」

## ライバル

ピンポ〜と玄関のチャイムが鳴った。アンナが小走りでかけていくと小太りのヒフミンがシャムネコがプリントされたトレーナー姿で玄関前に突っ立っていた。「こんにちは。亜紀ちゃんいますか？」ヒフミンは、近所に住む亜紀より一つ年上の男子で、将棋が大好きな坊やだった。ヒフミンは、ネコが大好きで、ピースに会いたくて時々遊びに来るのだった。ちょっと薄汚い服装のヒフミンを見たとき、ビビッと不吉な予感が起きた。

貧乏人を小ばかにする金持ちの秀樹と同席させるとひと悶着起きるのではないかと直感したアンナは、やんわりと笑顔でヒフミンを追い返すことにした。「今、ちょっとお客さんなの。ごめんね〜ヒフミン」そのとき、アンナの後ろから亜紀の声が飛び出した。「ヒフミン、いらっしやい。あがって、クラスのお友達もいるの。さあ」亜紀は、ヒフミンの右手をつかみ、引っ張りあげた。亜紀の歓迎を受けたヒフミンは、アンナの顔色をうかがった。

アンナは、亜紀が手招きしてしまったてまえ、追い返すわけには行かなくなった。でも、きっと、秀樹と喧嘩になると思い、亜紀をにらみつけた。亜紀には、アンナの表情の意味がまったく分からなかった。能天気な亜紀は、小太りのヒフミンをキッチンまで力任せに引っ張っていった。薄汚い小太りの少年を見た秀樹は、顔をしかめ、挨拶した。「こんにちは。クラスメイトの秀樹です」

ヒフミンは、金持ちの雰囲気や高価なジャケットを着ている少年に気後れしたが、勇気を振り絞って小さな声で挨拶した。「こんにちは。糸島小学校4年のヒフミンです。みんなには、ヒフミンと呼ばれてるけど。亜紀ちゃんに時々将棋の相手をしてもらってるんだ。よろしく」秀樹は、亜紀と仲がいいところを聞かされ、ムカついた。「へ～、将棋ね～。そんな古代ゲームをやっているのか。亜紀ちゃん、将棋なんかやっていると、貧乏臭くなるよ」

亜紀は、ヒフミンを侮辱する言葉に固まってしまった。秀樹は、貧乏人と頭が悪い男子を馬鹿にし、父親が金持ちであることを自慢することは承知していたが、まさか、初めて会う男子に卑劣な暴言を吐くとは、夢にも思わなかった。三人で仲良く学校の話をしたくて、ヒフミンを秀樹に紹介したつもりが、とんでもない出会いになったことに後悔した。亜紀は、ヒフミンのおびえた顔を見てこの場から逃げ出したくなった。



秀樹の暴言を聞いたアンナは、思ったとおりの展開になり、亜紀は、ヤッパ、男子の心理を知らない子供だと思った。固まってしまった亜紀を見かねたアンナは、ヒフミンに手を差し伸べた。「ヒフミンは、小学生将棋大会で、日本一になったのよね。古代ゲームでも、日本一は、見上げたものよ。さあ、突っ立ってなくて、さあ、座って。今日のおやつは、アップルパイ。ほっぺたが落ちるぐらい、おいしいんだから」

ヒフミンは、肩をすぼめてさやかの横に腰掛けた。さやかは、子供の話の邪魔にならないように、すっと立ち上がった。「アンナ、二階で、荷物の整理があるから」口早にアンナに声をかけて、二階に駆け上がっていった。アンナは、ヒフミンの前にアップルパイを置くと、ヒフミンお気に入りの竜王とかかれたマグカップにジャスミンティーを注いだ。「さあ、召し上がれ。ヒフミンの感想を聞かなくっちゃ」ヒフミンは甘いものが好きで、評論家のような感想を述べていた。

ヒフミンは口をモグモグさせ、笑顔を作った。「とってもおいしいです。さすが、お母さん。ほんのりとした甘さが、口いっぱいに広がります。まいう～～」おべんちやらを言ったヒフミンにカチンと来た秀樹は、さらにいやみを言い始めた。「君の肥満の原因は、甘いものの食べすぎだ。このままだと、糖尿病になるんじゃないか」亜紀は、顔が真っ青になった。どうして、秀樹は、仲良くしようとしなのだろうかと思ったが、どうしていいかわからなかった。

こんな険悪な状態は初めてで、とにかく秀樹の機嫌をとるために話題を替えることにした。秀樹が喜ぶ話題はないかといろいろ考えてみたが、即座には思いつかなかった。とりあえず、秀樹が得意なサッカーの話をすることにした。「今、ワールドカップの予選があつてるじゃない。日本は、どうなるかな〜？」秀樹は、サッカーの話しになって、俄然、目が輝き始めた。「日本は、問題ないさ。きっと、やってくれるさ」

秀樹は、小太りのヒフミンを心の底で笑いながら、ドヤ顔でヒフミンに質問した。「ヒフミンは、サッカー好きか？」ヒフミンは、スポーツが苦手だった。特に肥満のヒフミンは、走るのが苦手だった。サッカーが苦手なヒフミンは、しぶしぶ答えた。「やるのは、苦手だけど、見るのは好きだ。三浦選手って、年なのに、すごいよな」秀樹は、三浦選手をほめたことで、少し機嫌がよくなった。「へ〜、ヒフミンもサッカーのこと、分かつてるじゃないか。カズは、日本のキングだからな」

秀樹は、いつものごとくサッカーの自慢話を始めた。「僕は、フォワードだ。まあ、福岡のジュニアチームでは、かなり有名なんだ。ヒフミン、今度、サッカーをやろう」ヒフミンは、秀樹の機嫌がよくなったことで、少しほっとした。「足は遅いけど、やりたいな〜。ドリブル、教えてくれよ」秀樹は、快く返事した。「いいとも。重紀も、サッカー好きだよな」突然振られた重紀だったが、気まずい雰囲気にならないように、即座に笑顔で答えた。「サッカー、大好き。みんな、やろ〜よ」

亜紀は、なんとなく二人が仲良くなってきたようでほっとしていたが、秀樹がお金のお話を始めた。「プロって、儲かるんだろうな～。男子は、何と言っても、お金だから。な～、亜紀」またしても、突然振られた亜紀だったが、今度ばかりは、返事に躊躇した。秀樹は、金持ちであることを自慢しがっていると思えたからだ。しばらく考えて当たり障りのない返事をした。「プロのことはよくわからないけど、プロになれる人って、数少ないんじゃない」

秀樹は、さらに、プロの金儲けの話が続けた。「そりゃ～そうさ。プロの世界は、弱肉強食だからな。でも、貧乏人が億万長者になるには、プロになるのが一番さ。俺は、ケンブリッジ大学でAIを研究して、将来は、無敵のAIロボットを作ってやる。そう、ヒフミンは、どこの大学に行くつもりだ。まさか、奨励会？ってことはないよな」すでに奨励会に行くことになっていたヒフミンは、グサツときた。

勉強が苦手なヒフミンは、しばらく黙っていたが、自分の気持を言うことにした。「僕は、勉強が苦手なんだ。大学には行かない。でも、将棋のプロになりたい。自信はないけど」秀樹は、あきれた顔つきで皮肉を言った。「おいおい、将棋のプロか。まいったな～、貧乏人の夢は、ヤッパ、プロか。そうそう、プロがAIに負けたよな～。そんなんじゃ、いずれ、プロは消滅するじゃないか。そんな夢を砂上の楼閣、って言ってたような」

せつかく仲良くなってきたと思えたときに、秀樹の毒舌が始まり、空気が重苦しくなってしまった。亜紀は、とっさに手を差し伸べた。「いいじゃない。夢なんだから。ヒフミンは、将棋が好きなんだから。それでいいじゃない。夢を追いかけるのは、素敵なことだと思う」ヒフミンは、励ましてくれた亜紀に笑顔を向けた。秀樹は、ヒフミンの肩を持った亜紀に向かって皮肉を言った。「夢ね～、A I に勝てないプロってのは、恥さらしだよな～」

ヒフミンは、プロがA I に負けたニュースを思い出していた。事実、プロがA I に負けたときは、自分が負けたようで、涙がドツと零れ落ちた。しかし、夢をあきらめる気にはなれなかった。ヒフミンは、寂しそうな表情を作ると小さな声でポツリと声を発した。「僕には、将棋しかとりえがないから」ヒフミンはガクンとうなだれてしまった。しばらくすると、閉じたまぶたから涙がこぼれ落ちた。

涙を流したヒフミンに、亜紀は何と声をかけていいか分からず、アンナの助けを眼差しで求めた。アンナは将棋のことがよくわからず、何と言って励ましていいかまったく分からなかった。プロがA I に負けたことはニュースで知っていたが、別に気にするようなことではないと思っていた。でも、プロを目指している少年にとっては、一大事件だったことにヒフミンの涙を見て気づいた。

そのとき、突然笑顔を作った秀樹が声をかけた。「まあ、A Iの進歩は目覚ましい。でも、人間の頭脳は、無限の可能性を持っている。俺のA Iが勝つか、ヒフミンの頭脳が勝つか、勝負しようじゃないか。ヒフミンが負けたと決まったわけじゃない。どっちが勝つかは、やってみてのお楽しみだ。ヒフミン、いつか勝負できる日を楽しみにしてるぜ。それより、サッカーやろうぜ。亜紀、ボールもってこいよ。公園に行こう」泣きそうだった亜紀は、ジャンプして立ち上がると、涙が落ちないうちに、全速力で二階にかけていった。